2024年9月1日 礼拝メッセージ

聖書:エレミヤ書 1章1～10節
説教:主のことばがあった

はじめに

今回2ヶ月間の休暇をいただき、無事に戻ることができました。その間、役員を初めとして皆様の祈りと奉仕に支えられて、教会の歩みが守られたことを主に感謝いたします。休み中の出来事と言えば、8月に岩手に行く機会があり、久しぶりに親族に会うことができました。そこでいろいろなことを見聞きした。ひとことで言えば人の罪ということで、改めて聖書のみことばが迫ってくる経験をしました。

今日からしばらくエレミヤ書を見てまいります。今回は、エレミヤ書のなかから主なところを取り上げ、神に背き続けるイスラエルに対して神が何を語り、そこにどのような神の愛が示されていているのか、ともに考えてまいりたいと思います。

１　エレミヤ

１）時代背景

まずエレミヤ書の時代背景から。ソロモン王が亡くなって間もなくイスラエルは北王国と南王国に分裂し、それぞれが王を立てて別の道を歩んだことはご存じでしょう。信仰をもった王もその中にはいるにはいましたが、ほとんどの王は聖書の神を捨て、異教の神々を持ち込み、偶像を拝み、それを国民に強制していった。そうこうするうちに、北イスラエル王国が紀元前722年にアッシリアによって滅ぼされ、補囚となって主だった人たちが連れ去られていくということが起きてしまいます。エレミヤが預言者として召し出されたのは、それからおよそ百年経った、ヨシヤ王のときで、エレミヤの活動はこれも3節の最後にあるとおり、「エルサレムの民の補囚」まで続きます。これを見ただけで、エレミヤはどんな時代の預言者だったか想像できます。すぐ隣の北イスラエルが外国の軍隊に滅ぼされたのを間近に目撃しましたから、今度は南王国が攻められるのではないか、そんな不安のがあった。でも「楽観バイアス」が働いて、南王国は大丈夫に違いない。そう思って、目の前の生活を楽しもうとしていた。エレミヤはそんな時代に神のことばを語るように召されました。

今の時代にも似ています。札幌でさえクーラーがなければいのちの危険を感じるくらい夏が暑くなり、将来もっとひどくなっていくのではとだれもが不安に思っています。また、イスラエルとガザ、ロシアとウクライナの戦争のこともそうです。ニュースを見るたびに不安になる。でも一方では毎日、何もないかのように生活している。結局人間のすることはどんな時代でもそれほど変わりません。

２）　預言者として定めていた

そんな人間に神はどうされたのでしょう。5節。「わたしは、あなたを胎内に形造る前から あなたを知り、あなたが母の胎を出る前からあなたを聖別し、 国々への預言者と定めていた。」

ここに二つのポイントがあります。一つ目。人が母親の胎内にいのちとして誕生する前から、すでに神はエレミヤを知っておられた。それはエレミヤだけではない。私たちひとり一人が生まれるまえから神によって知られている。これは大切な真理です。ときどき「私なんか生まれてこなければよかった」と言う人がいます。「人間は偶然生まれてきただけで、何の意味もない」と考える人もいます。私もかつてそう思っていました。でもそうではない。私たちは、生まれるまえから神によって知られていた。つまり意味あるものとしていのちをいただいていたことになる。もちろん私たちには生まれた意味がすぐには分からないかもしれない。でも神はご存じである。私たちのいのちは神に覚えられている。ひとりぼっちではなくて、神がともにおられる。これは大きな慰めです。

二つ目。「あなたが母の胎を出る前からあなたを聖別し、国々への預言者と定めていた。」聖別というのは、神のために特別に取り分けるという意味です。私たちは、自由に職業を選ぶことができると教えられてきましたから、生まれるまえから神が決めて言われて戸惑うかもしれません。もちろん、神は私たちの自由意志を尊重されます。しかし預言者だけは特別で、人が預言者になりたいからなりますと言ってなるのではない。神に召された者だけが預言者として立つことのできる、それほど特殊な職なのです。そうすると選ばれたほうが大変です。エレミヤは、まさか自分が預言者に召されるなど考えたこともなかったわけですから。

３）罪の自覚

それでこんなことを言う。6節。「ああ、神、主よ、ご覧ください。私はまだ若くて、 どう語ってよいか分かりません。」

二つのポイントがあります。一つ目。エレミヤはこのとき20歳頃であっただろうと言われます。前の時代に活躍した、エリヤやエリシャやイザヤのことは、エレミヤの頃には伝説的な預言者として知らされていたでしょう。でも、そんな雲の上のような預言者の仲間に自分も加えられる。こんな若造がそんな大それたことができない。そんな素直な思いがある。

二つ目。彼は、主の御声を直接に聞いただけではなく、9節では、主が御手を伸ばして私の口に触れられたともあります。そのとき主の御顔が間近にあり、神の聖さが迫ってきたはず。そうしたらどうなると思いますか。聖い光によって自分の罪が暴かれます。「私はまだ若くて」ということば。言い直せば、「私はまだ律法を知らない分別のない罪人です」と告白しているのと同じです。「とても主の御用に役立てるような聖い者ではない。」エレミヤの預言者としての活動は、この罪の告白からスタートしていきます。

４）ふさわしくない者と思う者を召し出す

この教会では、いま後任の牧師を招きたいと祈っています。どんな方が招かれてくるのか、今はだれも分かりません。しかしわかることが二つある。その人はまず神に呼び出されて召された者であること。そして二つ目は、その召しに対して自分はふさわしくない者であるとの自覚を持っていること。この二つ。いつか後任の牧師候補となる方がみなさんの前に立つことになるはずです。そのとき、みなさんはしっかりと見きわめていただきたいと願います。

２　語りかける神

１）さばきと救い

神はエレミヤを預言者として召し出すとき、次のような神のご計画を明らかにします。9，10節。「見よ、わたしは、わたしのことばを あなたの口に与えた。見なさい。わたしは今日、 あなたを諸国の民と王国の上に任命する。 引き抜き、引き倒し、 滅ぼし、壊し、 建て、また植えるために。」

二つあります。一つ目。「わたしのことばをあなたの口に与えた。」預言者は、自分の好きなことを語ってはなりません。主がお語りになることをそのまま語らなければならない。たとえ相手が無視して聞く耳を持たなくても、あるいは怒って殺そうとしても、とにかくそのまま語る。これがエレミヤの一つ目の役割。そして二つ目。「引き抜き、引き倒し、壊し、建て、また植えるために。」一体何をこうするのか。国を、あるいは諸国の民をです。それはユダ王国のことであり、またユダ王国に敵対してくる諸外国、具体的にはアッシリア、エジプト、新バビロニア、当時の大帝国に対しても主は語ります。

語る内容は常に一貫しています。あなたがたは主に背き、主を捨て、ほかの神々を慕い求めて罪を犯した。貧しい者をあわれむことなく、正義をねじ曲げ、本当はどこにも平安がないのに、私たちは平安だと言って人々をあざむいてきた。もしこのまま主に立ち返られなければ、この国は滅び、補囚となって外国に連れ去られていく。そのようなさばきのことばを語りました。でどうなったか。結局ユダ王国は滅ぼされて補囚の民となってしまいました。それが、引き抜く、引き倒す、壊す、の意味です。

ここだけ見ると、エレミヤが神に立ち返れと警告しても無駄ではなかったのか。神の計画は失敗した。そう思われるかもしれません。でも神のなさることに無駄なことは一つもないはずです。

ではどう考えたらよいか。二つあります。一つ目。神に立ち返ることのできなかった南王国ユダは滅ぼされ、補囚となりました。神に背く者は神のさばきを受けなければならない。そのことをエレミヤは語った。しかしそこで終わらない。神のメッセージにはその続きがある。それが二つ目です。たとえいま国が滅び、補囚となって外国連れ去られたとしても、神はあなたがたを見捨てはしない。たとえ失敗してひどい結果となったとしても、神に立ち返り、自分たちのしたことを悔いて、罪を告白するならばあなたがたは救われていくのだ。そのことを伝えようとしているのです。それが、建て、植える、の意味です。

２）罪の世にあって

岩手に帰って、様々なことがあったと申し上げました。そこで見たのは、どんなに人が良くても、どんなにふだん親切に見える人たちでも、聖書が語るとおりに罪を抱えながら、神の正しさではなくて、自分が正しいと思い込んでいることをやっているという現実でした。信仰を持ち、神の正しさを知る者と知らない者とは、住む世界がまったく違う。そういうことを痛感しました。何を基準として生きるか、その基準軸が全然違って交わるところがない。まったく呆然としてしまいました。

そんなとき、イエスが語られたみことばが迫ってきました。マタイ5章13，14節。「あなたがたは

地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができません。」

聖書の神を信じる者がこの罪の世でなにかできることがあるのだろうか、いやなにもできない。どこかで諦めていたかもしれません。でも神はどうでしょう。もし神が諦めていたのならエレミヤを召し出して、神のことばを語らせることはなかったでしょう。どんなにひどい世であろうとも、神はさばきと救いのみことばを語ろうとします。私たちは先に救われた者として、小さなことしかできないかも知れない。たとえなにもできなくても、それでも私たちは地の塩、世の光としてこの世に立たされている。召し出されている。そういう自覚はあったでしょうか。

もちろん、ひとりで立ち向かうのではありません。8節にこうあります。「彼らの顔を恐れるな。わたしがあなたとともにいて、 あなたを救い出すからだ。 ――主のことば。」

神が私たちを選び出し、救われました。聖書を通して神の正しさを知っていることがどれほどの恵みであるのかを覚えながら、この恵みをまだ知らない人々に伝えてまいります。